

わたしにとっての、特別な本

小窪瑞穂 — ライター

『愛と同じくらい孤独』

フランソワーズ・サガン 朝吹由起子 訳/新潮社/1976年



わたしはとりわけ本と映画と音楽が好きなのだけれど、どの作品を味わっても、結局のところ、自分はそれらを作った“ひと”に興味があって、あらゆる芸術に携わるひと、表現するひとが好きなのだと思う。好きなひとの好きなものも追いかける。すると、だいたいその先にある新しい作品たち、作家たちも、やっぱり好きなのである。サガンも好きな作家の好きな作家だった。好きなミュージシャンやアーティストの愛読書のなかにもサガンの作品があった。今ふり返ると、わたしの人生は、サガンを避けて生きてこれないようになっていた。サガンにも好きな作家が存在するわけで、こうして追いかけて続けることによって、わたしたちの読書体験はより豊かなものになる。

この『愛と同じくらい孤独』は、約二十年分のサガンのインタビューが編集者によって集められ、最後にサガン自身が目を通し、まとめられたものである。サガンの生きざま、思想、人柄などがはっきりわかる、彼女の発言ひとつひとつが、彼女の小説世界よりもわたしを惹きつけた。これを読むと、彼女がどんな思いで、どんな意図で、物語を書き、書き続けてきたか、小説世界を体験しただけではわからないことがたくさん見えてくる。日本語訳を手がけた朝吹登水子（70年代以降の作品の翻訳は娘の朝吹由紀子）の日本語表現もわたしを魅了した。本作は朝吹由紀子訳である。まず、冒頭のインタビュアーの質問に対するサガンの回答が最高である。“そうでしたっけ。忘れていました。” 一問目のこの一言で、やっぱりわたしはサガンが好きだと思ったし、このインタビュー集のすごさをすでに感じとってしまった。

この本はいつしか、私のお守りの存在になった。調子が悪いとき、この本を読むとなんだか落ち着く。いつもの自分に引き戻してくれるのである。愛らしさやユーモアもありながら、ときに鋭く刺激的なサガンの言葉たちが、わたしの芯の部分活性化するのだろう。だから、この本はいつもわたしの手の届くところにある。

「ものうさと甘さがつきまるとって離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しい、りっぱな名をつけようか、私は迷う。」、1954年に18歳のサガンが書いたデビュー作『悲しみよ こんにちは』の書き出しのような、鮮烈な印象を与える数々の名言が、このインタビュー集のなかにも散りばめられている。それらにはっとするたびに、なんとも豊かで幸せな気持ちになる。サガンの“声”、ともいえるそれらが、こうしていまも世界中のひとびとに響き続け、それぞれの思想や意識や毎日へ、作用し続けている。 ◻